

氏名	かく どう まさ よし 角 道 正 佳
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 500 号
学位授与の日付	平 成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	土族語互助方言の研究

論文調査委員 (主査) 教授 庄垣内正弘 教授 田窪行則 教授 吉田和彦

論 文 内 容 の 要 旨

土族語互助方言は中華人民共和国青海省及び甘肅省で話されているモンゴル系の少数民族の言語であり、先行研究により那龍溝、哈拉直溝を初めとする下位方言が存在することが分かっている。様々な下位方言を含んでいる資料を整理し、先行研究で指摘されている事実との違いを指摘し、先行研究における記述の不十分さを補うために以下の研究を行った。本研究の目的は土族語互助方言のバリエーションを記述し、土族語互助方言に共通した特徴を浮き彫りにすることである。論じたのは以下の3点である。

1. 河湟語（東部裕固語，土族語互助方言（Mongghul），土族語民和方言（Mangghuer），保安語，康家語，東郷語）の中で土族語互助方言だけが持っている特徴は何か，2. 土族語互助方言の下位方言を分類することができるか，3. 1の特徴以外に土族語互助方言の下位方言を統合し一つの方言（あるいは言語）と呼べるような特徴はあるか。

第一部では第1章で、土族語の位置づけを明確にするために、河湟語（東郷語，保安語，土族語，東部裕固語，康家語）の特徴について述べ、諸言語を識別するパラメーターとなりうる諸特徴を提示した。また噶世長，清格爾泰の記述の不備を指摘した。

第2章で、土族語互助方言の下位方言（東溝，東溝大庄，哈拉直溝，沙塘川，丹麻，那龍溝，天祝）の資料に基づいて、表記体系について述べ、各下位方言を長母音，音節末のl，二重母音と長母音，二重母音化，円唇母音，舌先摩擦音及び破裂音の面から異同を仔細に検討した。

第3章で東山，紅崖子溝にまで対象を広げ、主として音韻・音声面での違いを明らかにし、大まかに言うと、auとuuの弁別及びaiとeeの弁別の有無で二つのグループに大別できることを論じ、コンピュータの形式を用いてwai方言（東溝，東山，那龍溝）とii方言（紅崖子溝，哈拉直溝，沙塘川，丹麻，天祝）という名称を与えた。さらに下位方言によってはある特定の語彙が不在であることを述べた。

第二部では資料は存在するものの音素分析や文法記述等の分析が十分にはなされていないバリエーションを豊富に含む神話，民話，叙事詩等の資料を分析した。

第1章で、*Aus der Volksdichtung der Monguor*の1，2巻に収録されている民話，諺，神話等のテキストに用いられている言語に出現する母音と子音の目録を作成し、すべてのバリエーションを記述した。自由交替の中には、長母音／短母音の交替，母音の音価の交替，子音交替，子音と母音の交替，語頭母音の有無による交替，語末母音の有無による交替，子音の有無による交替等の各種の交替が見られることを示した。

第2章で、Schröderの遺稿として手書きのまま出版されているゲセル叙事詩のテキストを対象にして出現するすべての母音，子音を抽出し、どのようなバリエーションを持っているかをできるだけ多く記述した。多様な自由交替がある中で、母音の長短の区別は曖昧であること，長母音aは第一音節には少なく，第二音節以下に頻出すること，uは必ず他の母音との交替形を有すること，動詞語幹末母音の出現には一定のパターンがあること等を明らかにした。また一部の母音について音素分析を試みた。

第3章で、丹麻の母語話者 Limusishden が、彼独自の正書法で表記し出版した書物に現れるすべての語彙とそのバリエーションを検討し、丹麻の特徴を音韻、形態、文法面から記述した。特に注目すべき事柄は、l, r は音節末に現れないこと、長母音、二重母音は上昇する傾向があること、後舌の長母音は前舌の長母音に比べて短母音化する傾向が強いこと、広い長母音の方が狭い長母音に比べて短母音化する傾向が強いこと、与位格 *-di*、共同格 *-di(i)*、動詞作成接辞 *-di* の直前に *sh* という添加子音が挿入されることがあること、l の直前に *n* が添加する接辞があること、*nama* ~ *mama* の交替があること、動詞の接辞の *-nii*/*-ni* が動詞の意味によって区別されていること等である。

第4章で、天祝の特徴を持っている『格薩爾文庫』第三卷（上）の全語彙を対象にして検討した結果、他の下位方言との違いとして以下の特徴を持っていることを明らかにした。語頭では a, i は常に長母音化している。ee と ai が融合して一部は高母音化している、uu と au が融合している。u, e, o で始まる語はない。与位格の前に特殊な添加子音が現れる。te 「と」と ta が峻別される。単数形式は *-ge* がなくすべて *-nge* である。コピュラは *wai* がなくすべて *ii* である。副動詞 *-sangulo* が出現しない。また一部の母音について音素分析を試みた。

第三部では第1章で席元麟の母音分類が通常の記述と異なる点に注目し、その理由を明らかにした。席元麟の「土族語音位系統」では普通の母音と breve 付きの母音とが記述されている。前者は標準語の長母音又は短母音に対応し、後者は標準語の短母音にほぼ対応する。検討した結果次のことが分かった。「二音節語では母音の長短の違いが同一語中にあるときは短母音のほうに breve を付ける。ただし、短母音が閉音節にある場合は breve を付けない。長母音でなく二重母音の場合は短母音の開音節が隣接していても breve を付けない」。

第2章で『土漢対照詞彙』及び『土漢詞典』に用いられているローマ字表記による正書法を『土族語簡誌』及び『土族語詞彙』に用いられている IPA による表記と突き合わせ、各音素の異音が現れる条件を検討し、正書法がどのように作られているかを論じた。また、『土漢対照詞彙』と『土漢詞典』の異音をどの音素に帰属させるかによる表記上の違い、[N] を表す文字の曖昧性、アポストロフィーの使用法、分かち書き等について論じた。

第3章で、正書法のバリエーションを2冊の辞書及び7冊の教科書類を検討することによって調べた。バリエーションの種類には、ある音をどの音素に帰属させるかの違い、分かち書きをいつするか（ある形態素を語幹に付けて書くか語幹から離して書くか、どこで切るか）の2つに大別できるが、それらが絡み合ったケースもあり、疑問助詞が関係する綴り字は5通りに分類しなければならないこと等を論じた。またバリエーションの初出のものをリストアップした。

第四部では、先行研究で十分には記述されていない項目に関して、利用できる全資料を対象にして検討した結果を示した。

第1章で、モンゴル語の諸方言には存在するが東部裕固語、保安語、東郷語、ダグール語には存在しない語幹末添加音 n（いわゆる「隠れた n」）が土族語には存在することを示し、土族語互助方言では与位格、奪格のみならず、*-gu* 「の」、*-da* 「も」が添加する際、さらに *-gu*（形動詞）にも語幹末添加音 n が現れる場合があること、n の有無によって意味の違う語の対があること、n の有無が意味の差異をもたらさない語もあることを示した。

第2章で、土族語以外には保安語にしか見られない形式 *-nge* について論じた。*-nge* は従来の説明で単に「単数を表す」と記述されることが多かったが、各種の品詞に接続し、格標識の後ろにも現れる例を提示し、意味的にも様々な形式に附加することを示した。また文体的には韻文には使用例が少ないこと、談話の面からは列挙する場合、初出名詞句、限定名詞句、話者交替、話題・主題変換、確認、繰り返し等の機能を持っていること、語り手によって使用法がかなり違う場合があることを示した。

第3章で複数形接辞の用いられ方について全資料を検討し、先行研究でよく言われている事実（*-sge* と *-ngula* は互換可能である）が正しくないことを指摘し *-ngula* は人を表す語彙にしか付かないこと、双数を表す接辞が *-ngula* とは限らないことを指摘した。また一部の先行研究で述べられている一人称複数の包括形/除外形の区別の存在が事実ではなく、既に区別は崩壊していることを指摘した。

第4章で土族語に固有の位格と与位格の用法と比較し、両方使える場合、位格しか使えない場合、与位格しか使えない場合について、主として動詞の意味の面から26通りに分類し、違いを明らかにした。いわゆる文法格を表す場合は与位格しか使われず、位格はもっぱら具体的な場所を表すこと、しかしその場合も与位格は使用可能であることを示した。さらに位格と与位格の使い分けが元朝秘史の *dur* と *da* の使い分けに類似した点があることを指摘した。

第5章で、モンゴル諸語の中で土族語に特に広く現れる複合格の確認できたすべての組み合わせを記述した。

第6章で、土族語の類義語のうちで「見る」を表す3語 *sge-*、*uje-*、*nau-* の用い方を自制性／非自制性、「～てみる」、目的、命令、意志、継続性、抽象的な目的語、目的語をマークする格、使役の観点から検討し違いについて述べた。*nau-* が出現しないテキストでは *uje-* がその代わりに用いられるが、*sge-* の用法とはかなり違いがあること、*uje-* の用法は目的語に抽象的なものを取りうることを論じた。

第7章で、テキストの性格上たまたま出現しない形式がありうるけれども、下位方言間で確認できる相違について、程度を表す語、副動詞、動詞の否定形式、終止形及び属・対格、「ような」「ように」、「他の」「他に」、普通名詞の複数形、接続詞「と」／助詞「も」、語彙の観点から論じた。また動詞のテンス、アスペクト、モダリティーを担う形式が、下位方言の違い（あるいは語り手の好み）を超えて共通に観察される点に注目し、テキストの内容を、解説、物語（地の文）、会話、序文、あとがき、歌、諺、謎々、タブー、文書に分け、どの形式が現れうるかを記述した。

以上の考察の結果、本研究で明らかにしたことは次のとおりである。1 に関しては、(1)位格の用法（第四部第4章）、(2) *-wa* が会話にのみ用いられるという事実（第四部第7章10）。

2 に関しては(1)母音の融合の仕方により *wai* 方言と *ii* 方言とに分類できること（第一部第3章3）、(2)動詞に付く *-ni* と *-nii* の識別ならびに属格・対格の形式に主題化標識 *ni* が付くとき長母音化し *-nii* となるという並行する現象により東溝、丹麻を他の下位方言から識別できること（第一部第3章23、第二部第3章9、第四部第6章3、第四部第7章4）、(3)形動詞過去 (*-san*) 及び仮定副動詞 (*-sa*) の *s* の有声化の有無による下位方言の分類（第一部第3章13）。

3 に関しては(1)語幹末添加子音 *n* の存在（第四部第1章）、(2)一人称複数形の包括形／除外形の区別の消失（第四部第3章8）、(3)意志形 *-ya* の随意的脱落（第一部第1章4、第二部第3章8、9）、(4)否定辞 *sii* の衰退（第四部第7章3）、(5)複合格の発達（第四部第5章）である。

論文審査の結果の要旨

中国青海省や甘粛省に分布するモンゴル語の一種である土族語はモンゴル語研究にとって重要な言語である。この言語の研究成果の多くは中国から出版されており、記述方法や内容の精度に大きな問題が認められる。論者は80年代からこれら出版物の内容を整理し、土族語の全貌を明らかにする努力をしてきた。本論はその集大成であり、20編に及ぶこれまでの論者の論文をとりわけ土族語互助方言（Mongghul 語）に焦点を絞ってまとめたものである。

本論文（和文 A4 判351頁）は、4部、全17章から構成されており、その内容は以下の4点に要約できる。

まず第1点では、東部裕固語、土族語（互助方言（Mongghul 語）、民和方言（Mangghuer 語））、保安語、康家語、東郷語から構成されるいわゆる「河湟語」の中で土族語互助方言だけが持っている特徴について論じた。これまで簡単にしか記述されていなかった土族語互助方言に特有とされる位格は、与位格が文法格も含む広い意味を担っているのに対し、慣用的な用法を除くと具体的な場所を表す場合にのみ用いられるという事実を明らかにした。また単に過去を表すとしか記述されていなかった形態素 *-wa* が土族語互助方言では会話にのみ用いられる文末形式であるという事実を指摘し、例外的に副動詞的機能をもつ *-wa* は実は副動詞 *-waanu* の変種である *-waa* の短母音化した形式であることを明らかにした。この文末形式の機能に類似したものは元朝秘史の言語にも見られるが、他の「河湟語」及びモンゴル諸語で *-wa* 系（*-ba* 系）の形態素が会話にもっぱら用いられるという事実はない。

第2点では、土族語互助方言の下位方言の分類について論じたものである。まず、母音の融合の仕方により「*wai* 方言」と「*ii* 方言」とに分類できることを示した。すなわち紅崖子溝、哈拉直溝、沙塘川、丹麻、天祝の下位方言では、保守的な下位方言といえる東溝等の /ai/ と /ee/、/au/ と /uu/ とがそれぞれ合流しており、この合流の有無に基づいて2つの下位方言グループに大別できることを示した。コピュラの形式が2種類あるのはこの融合のためであり、その2グループをコピュラの形式を用いて「*wai* 方言」（東溝、東山、那龍溝）、「*ii* 方言」（紅崖子溝、哈拉直溝、沙塘川、丹麻、天祝）と命名している。次に、動詞に付いて終止形を表す *-ni* と *-nii* の違いは先行研究では述べられていないが、*-ni* は非自制性の述語に付き、*-nii* は自制性の述語に付くという違いのあることを東溝及び丹麻の下位方言で明らかにした。また、この両者が区別されている下位方言では名詞に付く属格・対格の接尾辞 *-ni* が主題化標識 *ni* を伴うとき接尾辞母音が長母音化し *-nii* とな

るという現象のあることを指摘した。そしてこの現象は母音の長短が明瞭な下位方言である哈拉直溝、天祝には起こらないため、東溝、丹麻を他の下位方言から識別する基準となりうることを示した。さらに、形動詞過去 *-san* 及び仮定副動詞 *-sa* の *s* が有声化する下位方言（沙塘川、丹麻、那龍溝、天祝）と有声化しない下位方言（東溝、哈拉直溝）に大別できることも示した。

第3点では、第1点で論じた土族語互助方言の特徴以外に、この方言を、下位方言を統合した一つの方言あるいは一つの言語と認定できるようなさらなる特徴があるか否かについて論じ、5つの特徴を提出した。すなわち、(1)「隠れた *n*」の存在、(2)一人称複数形の包括形／除外形の区別の消滅、(3)意志形 *-ya* の随意的脱落、(4)否定辞 *sii* の衰退、(5)複合格の発達、の5つである。これらの特徴は一部他の「河湟語」にも見られる現象であるが、土族語互助方言のすべての下位方言に共通する特徴であるという点で重要である。(1)「隠れた *n*」に関しては名詞のみならず *-gu* の付いた形動詞にも生産的に出現しうることを示した。名詞に現れる「隠れた *n*」はモンゴル語には珍しくない現象であるが、「河湟語」では土族語互助方言及び土族語民和方言にしか現れないという事実を本論文が初めて指摘している。(2)土族語民和方言を除く他の「河湟語」ではなお区別が保たれている一人称複数形の包括形／除外形の区別が土族語互助方言ではすでに消滅していることを各下位方言の資料を検討することから明らかにした。(3)については土族語互助方言では意志形 *-ya* が *yau-*「行く」に添加される場合に限って随意的に（丹麻では義務的に）脱落させることのできることをすべての下位方言において確認した。土族語民和方言及び保安語にも類似した現象は見られるが、「行く」に限らない。(4)については、否定辞 *sii* の使用が減少し、代わりに *lii* や *gui*, *gua* がその役割を果たしていることを指摘した。また哈拉直溝、丹麻の下位方言では *sii* はまったく使用されなくなっていることを示した。(5)については土族語互助方言では複合格が非常に発達している点を述べた。

第4点は、上記3点以外に先行研究で明記されてない次のような事実を明らかにした。まず、土族語互助方言においては長母音と短母音の区別が曖昧であるという事実を以下の点を示して議論した。(1) *Geser rēdziawu* の資料（沙塘川）では *ā* は第一音節に現れることが極端に少ないこと、(2)丹麻では第二音節以下の長母音の短母音化が進んでいること、(3)天祝では語頭で *a* が *ā* に、(j)*i* が *jī* にそれぞれ合流しているため、長短の区別がこの位置では中和されていること。次に、土族語互助方言には語中添加子音のあることを明確にした。語中添加子音 *sh* の存在を丹麻及び天祝の資料を検討することで発見し、その出現状況が生産的であると主張した。また他の下位方言にも語彙的には散発的に現れることも指摘した。さらに、複数表示形態素 *-sge-* と *-ngula* が互換可能であるという先行研究の指摘を批判し、この2種の接辞は実際には互換不可能なもので、*-ngula* は人にも適用され、また、沙塘川では *-sge-* が斜格において義務的に *-s* になることを指摘した。

論者の二十年に及ぶ土族語研究は徹底したものであり、先行研究や提出された資料を余すことなく活用し、土族語の構造と性格をかなりの程度解明することに成功している。また、論者の研究はしばしば引用され海外においても高く評価されている。しかし本論文にも欠陥はみられる。特にデータ分析の結果が分類のみにおわっており、共時的あるいは通時的変遷の過程が推論されていないところが散見される。この欠陥は論者の慎重な態度を顕しているとも言えるがやはり読者には不満が残る。また、二次資料を分析の対象としていることから、分析に戸惑いの見られる場合もある。この点は、今後の実地調査によって改善できるものと思われる。しかし、このような欠陥も本論の根底を揺るがすものではなく、その内容は高く評価できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年11月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。